

発行日 平成26年 8月1日(金)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 京中生に インタビュー 2014

### 第2回

西村 由布さん(1年)  
「ひめゆりの少女たち」  
西村 元太くん(3年)  
「桐島、部活やめるってよ」

おとなの人たちも、中学生が読んで  
いる本に目を向けてください。意外な  
発見があるかも… <編集部>



左：西村 由布さん 「ひめゆりの少女たち」  
那須田稔／著 (偕成社, 1977)

右：西村 元太くん 「桐島、部活やめるってよ」  
朝井リョウ／著 (集英社, 2010)

——兄弟で本を紹介しあったりするんですか？

由布 いや、全然ないです。「ひめゆりの少女たち」は家にあった本です。日本の領土で行われた唯一の地上戦である沖縄戦「ひめゆり部隊」は、その沖縄戦の犠牲になって散っていった看護婦隊の一つです。

——「ひめゆりの少女たち」を読んで、その後で「桐島、部活やめるってよ」の少女たちを見ると、この70年間の日本の若者の変化をもろに感じて、頭がクラクラします。

元太 「桐島」は、読書感想文の締め切りに追いつめられて、ぎりぎりを選んだ本です。「部活」という言葉に惹かれて、何か役立つこともあるかな…と思って。

——ところが、読んでびっくりなんだよね。

元太 そうです。主人公だと思っていた「桐島」は登場せず、物語の背後に「桐島、部活やめるってよ」という言葉がぼわっと浮かんでいるだけ。この小説は、桐島が部活をやめるといふ噂によってなんとなく揺れ動くクラスメイトたち5人の物語だったんです。

——夏目漱石「三四郎」の昔から、この「桐島」まで、どんな作家にとっても自分の青春ってかけがえのないものらしいですね。でも、歴代の青春ものの中でも、この「桐島」がいちばん裕福な青春じゃないかな。登場人物たちの身のまわりに物があふれかえっている。

元太 5人の中では、唯一の文化系クラブ、映画部の前田涼也に目が行ってしまいます。ここまで自分の好きなことに夢中になれるなんて、意外とガッツがある人ではないだろうか。

——私は「竜汰と志乃」の描き方がけっこう気に入ってます。いわば、クラスの中のヒーローとヒロイン。この贅沢な高校生活の頂点にいるはずの人間を意識的にペラペラの感じに描いているような気がします。そして、わざと「竜汰と志乃」の脇にいる5人の方にスポットライトをあてる。そうすることによって、この、物があふれた時代の空虚な人間の心をうまく浮き彫りにしていると思いました。「ひめゆりの少女たち」の時代には想像もつかない変な技だけ。

2ページ目へ続きます

京極読書新聞は 毎月1日発行です。



1 ページ目からの続きです

由布 せっかく女学校を卒業したのに、望んでもいない「ひめゆり部隊」に招集されて、戦場で命を落としていった人たちがかわいそうです。やりたいことがなんでもできる今の私たちの時代の幸せを大事にしなければならぬと思いました。

———今の人間や時代を語る時、「ひめゆりの少女たち」は必要ですね。「桐島」だけでは、何かが抜け落ちる。

由布 学校に行けること、勉強ができること、たくさんの友だちと遊べること、すべてが幸せだと思います。いつの時代の若者たちもこんな幸せに包まれて生きていたのではないことは、いつも、どこか心の片隅に置いておきたいと思います。



左：東倉 志穂さん 「1リットルの涙」  
木藤亜也／著（幻冬舎、2005）  
右：藤波 愛月さん 「ありがとう3組」  
乙武洋匡／著（講談社、2012）

京中生に  
インタビュー  
2014  
第2回

## 藤波 愛月さん(1年) 「ありがとう3組」 東倉 志穂さん(2年) 「1リットルの涙」

———「1リットルの涙」の木藤亜也さんが闘病生活をしていた1980年代前半って、日本の文化面でも大きな変化が起こった時代なんです。レコードからCDへ。東京ディズニーランドが誕生。庶民でも買える値段のビデオデッキやパソコンの登場は、日本人にいろいろな思考の変化をもたらしました。物事は「プレイバック」とか「リセット」できるという考え方とか「漢字は文字変換してつくる」といった考え方が登場したのはこの時代からです。そして、その極めつけが「携帯電話」でしょうか。「1リットルの涙」は、それらの一切が登場していない時代、昭和の日本人の考え方や生活が描かれている点で、とても貴重な一冊になってきつつあると思います。

東倉 十五歳で「脊髄小脳変性症」の発症。「病気はどうして私を選んだのだろう。運命という言葉では、かたづけられない」と日記に書いています。しかし、亜也さんは冷静に考え、あえて公立高校を受験しました。「私から学ぶことを取ったら何も残らない」という、亜也さんの強いプライドを感じます。

———しかし、病魔はどんどん迫ってくる…

東倉 養護学校への転校案が 浮かび上がってきます。東高にいたい。友達みんなと勉強がしたい。しかし、病気は無情にも進行する。亜也さんは、日記に、東高を去るための決断に「1リットルの涙が必要だった」と書きました。

———本のタイトルですね。

東倉 「1リットルの涙」の意味が初めて明かされて、私の目にも涙があふれてきました。私は、この木藤亜也さんの長い日記の中に、一度も「死にたい」という言葉が書かれていなかったことに驚きを感じます。

———そうなんです。今まで「1リットルの涙」はいろんな人が読書感想文を書いてきましたが、そのことを書いたのは東倉さんが初めてですね。着眼点がびしびしと決まっていた感想文でした。

藤波 乙武洋匡さんも、まちがっても「死にたい」などとは言わない人ですね。

———そうです。それで、今日はお二人にインタビューをお願いしました。



藤波 私がいちばん感動したところは修学旅行の話です。修学旅行直前、6年3組担任・赤尾先生（乙武さんがモデル）のパートナー白石先生が骨折。「五体不満足」の赤尾先生ひとりでは引率は無理ということで、3組の修学旅行は大ピンチに陥ります。しかし、このピンチを打開したのも3組の生徒自身でした。「先生の世話、オレたちにやらせてください」と学校側に申し出たのです。職員会議の反対とか、いろいろなこと

はあったけれど、生徒たちは一生懸命練習し、ついに全員での旅行を成功させたのです。私はすごく感動しました。



## 米山 怜那さん(1年)「ウルルの森の物語」 芳賀 丈 くん(2年)「旅猫レポート」

京中生に  
インタビュー  
2014  
第2回

——今日は「動物」の本つながりで、お二人にインタビューです。

米山 私はとてもめんどくさがり屋なんですけど、動物や生き物の話になると生き生きとした気持ちになります。そこで、大好きな動物の本で、今の自分を変えられる本はないかなと思って「ウルルの森の物語」を選びました。

芳賀 僕は「旅猫レポート」のナナ（猫）とサトル（人間）の関係が、まるで親子のように描かれているところが好きです。

——この表紙の、村上勉さんの絵がとても懐かしい。この人は作家の佐藤さとるさんとコンビで「コロボックル物語」シリーズをつくっていた人なんです。（「だれも知らない小さな国」とか、読んだことない？）

芳賀 特徴のある絵なので一目でわかりますね。ナナのイメージがくっきりします。

——うわさでは、その「コロボックル物語」を有川浩さんが引き継いで書いてゆく計画があるらしい。もちろん挿絵は村上さんで。ナナの他には、気に入った登場人物とか、いましたか。

——この小説、最初が四月の転入生、巨体の問題児・前川泰示（たいじ）の登場で始まって、最後の山場、バレンタイン・デイでの泰示の覚醒の場面で話を締めるなど、けっこう構成が整っていますね。

藤波 泰示の一年間の成長、赤尾先生の一年間の成長、クラスのそれぞれみんなの成長が混じり合って、みんなから元気をもらいました。

——読書感想文コンクール作品集で、なにか他に読みたい本とか、ありましたか？

藤波 私はやっぱり「永遠のO」ですね。

東倉 剣道をやっているので、「武士道シックスティーン」読んでみようと思います。

芳賀 ヨシミネですね。あの修学旅行中に、九州の小倉までの脱走を手伝おうとする親友の。

——私は叔母さんのノリコかな。後半で、どんどん大きな存在になってゆく描き方を見て、有川浩って物語が上手いなあと思いました。

芳賀 僕は星新一の小説もよく読みます。こういう、起承転結がきちっとした小説が好みですね。

——「ウルルの森の物語」、もちろん本もおもしろかったけれど、それ以上に、米山さん、相変わらず読書感想文が上手いなあと思いました。じつは、小学校の出前図書館で読書感想文の話をする時、今でも、米山さんが小学2年生の時に書いた「りゅうのめのなみだ」の感想文を使うんですよ。



3ページ目からの続きです

京中生に  
インタビュー  
2014  
第2回

米山 大好きな動物の本に出会うと、自然に文章が湧いてきます。今回も、ラストの、ウルルを森に帰すシーンに感動してしまいました。

——ウルルというのは、とっくに日本から絶滅したとされているオオカミの子どもなんですね。そのオオカミが北海道に生きていた！というところから物語が動き出す。そして、大慈・夏子・昴・しずくの一家四人もそれぞれが変わってゆく。

米山 森へ帰すシーン。お母さんオオカミが姿を現しているのに、ウルルは動こうとしない。迷っているウルルに、昴としずくが涙をこらえてビードロ（ガラス玉）を投げつける。ウルルも変わらなければならないし、昴やしずくたちそれぞれも変わってゆ

かなければならないことが胸を打ちます。

——米山さんは、その感想文の前段で、自分が小さい時に家で飼っていたゴールデンレトリバーの死のことを書くでしょう。この小技が、後のウルルとの別れの場面の感想文に効いてくるんですよ。センスだと思うなあ。計算でなく、自然にこういう文章が書ける才能をこれからも大切にしてください。ところで、最近、なにかおもしろい本に出会いましたか。

米山 この読書感想文作品集の中では、藤波さんの読んでいた「ありがとう3組」に興味を持ちました。今、読んでいる本は「オリンポスの神々と7人の英雄」という本です。



左：米山 怜那さん 「ウルルの森の物語」  
百瀬しのぶ／著（小学館，2009）  
右：芳賀 丈くん 「旅猫リポート」  
有川浩／著（文芸春秋，2012）

## 夏休みは湧学館へ行こう!

●臨時開館(10:00-18:00)●

7/28(月)、8/4(月)、8/11(月)

●図書10冊貸出●

7/25(金)～8/17(日)

ご利用お待ちしております

### 発行

京極町生涯学習センター湧学館  
〒044-0101 京町字京極158番地1  
TEL 0136-42-2700(代表)  
FAX 0136-42-2032  
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

